

ゆめぽっけ

伝統
これからの
入門ガイド



入院している子どもにも「早く病気を治して、治った子どもたちが多い。毎週土曜日は早く遊びたい」と言った。日午前の1時間半ほど、毎週土曜日のボランティアが参加して、プレイルームや病室で、子どもたちとおもちゃなどで遊ぶ。乳幼児もいる。初めは少し死んでいる子も、遊びに夢中になるうち、はじやいな笑顔をおみせる。

「NPO法人病気の子ども支援ネットワークのボランティア」の理事長、子どもの遊び相手をするボランティア、アタ。

新宿区の訪問保育士をして、1999年、同区以外の子どもたちにも支援できないか、というのがボランティアを始めきっかけだった。

活動拠点の一つとしているのは国立国際医療センター(新宿区戸山)だ。白

4月のある日、活動を終

病院ボランティア④



病気の子どもたちとボランティアの交流。元患者の家族ら(前列左から)とボランティア(後列左から)の交流。元患者の家族ら(前列左から)とボランティア(後列左から)の交流。

NPO法人病気の子ども支援ネットワークのボランティア 国立国際医療センターをはじめ国立がんセンター中央病院、順天堂医院、東京医科歯科大学病院で各ボランティア団体が活動。「子どもが好きで、遊びが好きな人」が要件。▽医療行為や遊び以外の行為にかかわらない▽守秘義務、プライバシーを守る一などの注意事項も。事務局☎03-3521-1425(ファクス兼用)。

病気だって子は遊びたい

えた坂上さん(ボランティア)に、元患者家族らが加わって新宿区で「病気の子どもたち」の会をした。病気の治った子どもたちが女子学生ボランティアと走り回り、うち解けた雰囲気。

ボランティアの一人、神馬区の主婦、高橋潤子さん(今は2年前から遊びのボランティアに参加した。近くの病院のボランティアも20年近く続けている)。「子育てが終わってお茶やお花などのお稽古」をしながら、自分解けた。をしいたいと思つて(病院)ボランティアを始めた。本山に多くのことを教えられる。ゼロ歳の子からも学ぶことが多い」と話す。

大田区の東京消防庁職員、前田耕作さん(今は、教養併修で小児科医を目指して「病気の子どもたち」に何かできないか」と誘われ、1年前から参加する。「入院が長くなると大人でも大変。少しでも病気のつらさを忘れさせてあげたい。子どもの笑顔が、日々の生活のエネルギー」になっている。

世田谷区の造形教室講師、山内朝子さん(今は子どもたちとアクリル絵などを一緒に作る)。「初めは携帯ゲームの方がいい」と言っていたけど、作っているうちに真逆になっていく。出来上がったのを手に「ほくが作ったんだ。見てほく」という誇りや笑顔にうれしくなる」と言う。

坂上さんは「当初、病院にこまめに訪問する場という意識が強く、遊びのボランティアに対する壁があった。それでも親の要望もあり、徐々に活動が理解されるようになってきた。欧米に比べてまだ遅れているので、もっと広げていきたい」と話す。